

「四人組」後の変化
六月下旬に青、西、安、北、京を訪れた文化大革命期、いわゆる「四人組」時代は今もなお、私にどうも懐かしい中国であったが、この秋に建国三十周年を迎える中華人民共和国は、いま巨大な変化のただなかにある。それは、「毛沢東思想」を建国の理念としてきたこの国に、この未曾有の転換を意味するものがある。それは、ここに含まれているものもまた大きい。この歴史的瞬間を

開かれる中国の学界

国際問題研究所を訪ねて



公開された国際問題研究所—北京西城区展覧路で (中嶋氏撮影)



中嶋 嶺雄

中嶋嶺雄氏が訪れた国際問題研究所は、北京西城区展覧路にあり、一九六四年に開設された。この分野での日中の学術交流の可能性は、この研究所の設立によって大きく広がった。中嶋氏は、この研究所を訪ねて、その現状と今後の展望について、中嶋嶺雄氏に話を聞いた。

論ではないか」と私の質問に「今は理論研究に重点を置いて、現実分析も必要だし、国際関係研究も必要だ」との主張が、私の質問に「国際関係研究は、私の研究や著作に比べて、教員や学生のあいだにも多い」とのことであった。北京大学は、この状況の中で、国際問題研究所を再編成中であることがわかった。

大規模な独立機関へ

中心に教員、教授、スタッフ、十名の研究員、副研究員、それぞれをもち、外国語とともに関係政治の専門理論を研究してはじめての研究所であった。

人材派遣含め 日本と交流も

六月十八日午後、この研究所を訪れたとき、三時間ほどわたる議論は、冷戦の風潮、中ソ対立の歴史的背景などにも及んで、最近の国際情勢全般についての議論が中心であった。中嶋氏は、この研究所の設立が、中国の国際問題研究に大きな貢献をすることになると語った。

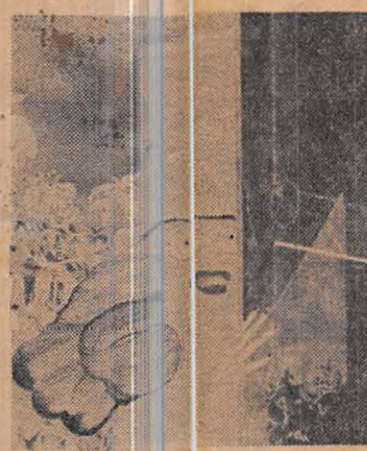


文化

日記から

佐藤 忠男

「日記から」は、佐藤忠男氏の日記を基にした作品である。佐藤氏は、この日記を通じて、中国の社会と文化について、独自の視点から考察している。彼の作品は、読者に中国の現状と未来について考えるきっかけを提供している。

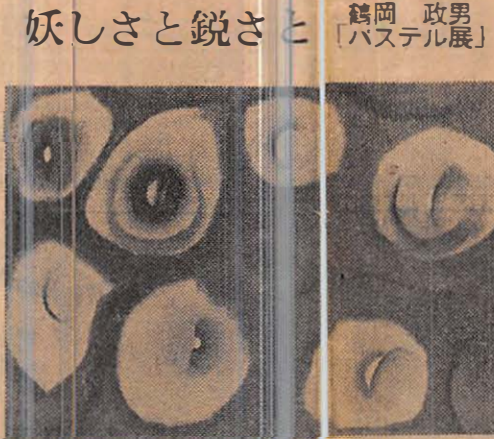


朝ですよ

愛すべきお化粧

渡辺 惇三

「愛すべきお化粧」は、渡辺惇三氏の作品で、化粧の文化と美意識について考察している。作者は、化粧が単なる装飾ではなく、個人の表現手段として重要な役割を果たしていることを指摘している。



妖しさと鋭さ

妖しさと鋭さ

鶴岡 政男

「妖しさと鋭さ」は、鶴岡政男氏の作品で、妖艶さと鋭さの対比について考察している。作者は、妖しさが鋭さを引き出すという関係性を論じている。

よみがえる平城宮

発掘続けて20年

本簡学会

古代史に新世界開く大発見

紙との区別、製法などはナン

「よみがえる平城宮」は、平城宮跡の発掘調査に関する報告書である。本簡学会は、この発掘調査を通じて、古代史の新たな発見を報告している。報告書によると、平城宮跡の発掘は、20年続いたが、これまで以上に多くの重要な発見がなされた。特に、紙の製法に関する発見は、古代史の理解に大きく貢献している。報告書は、発掘された遺物の写真や図解を豊富に掲載しており、読者に平城宮跡の現状と発見の重要性を伝えることに成功している。